

サウイウモノニワタシハナリタイ

安中市立第一中学校

三年 柴山 祥

「サウイウモノニワタシハナリタイ」は、宮沢賢治が作った詩「雨ニモマケズ」の締めくくりの文である。私がこの詩と出会ったのは六年生のときだった。欲張ることをせず、他者を思いやる人になりたいという宮沢賢治の思いに感動し、私もそういう人間になりたいと思うようになった。

しかし、現実には理想通りには行かず、他者よりも自分を優先したくなる時もある。

あるとき、部活を終え家に帰ると「めんどくさい」という気持ちが芽生えた。それは「明日お墓参りに行くよ」と母から言われ、ついていくことになったからだ。大事なことだと分かっているが、やりたいことが他にもある中でお墓参りに行くのは気が進まない。翌

朝、重い足取りで車に乗り込み、母や伯母と墓地へ向かった。

車から降り、まず最初に思ったのは「風強っ」ということだ。そう、その日はとても風が強かったのだ。

憂鬱感は余計に増していき、機嫌も悪くなっていった。

墓石にかける水や花の用意が終わり、母や伯母は階段を登った。そして私はその隣の芝生の坂を駆け上った。墓の前で花を供えようとしたそのとき、

「ボワッ」

母や伯母たちが「大変だ。どうしよう。」と騒いでいた。「なんだろう。」と振り返ると、火が見えた。その日の強風により、線香につけた火が芝生の坂に燃え移っていたのだ。そのときはまだ「水をかければ消えるだろう」と少し軽く考えていた。しかし、再びの強風により火はさらに燃え広がった。燃え移るスピードは凄まじく、水をかけても火は止められず、ほんのわずかな時間で、私たちだけでは手に負えないほどになってしまった。そのときだった。周りにいた方が異変に気づいて集まり、水をかけるのを手伝ってくれた。何

度も往復して桶に水を汲んでくれた方。自分の靴や衣類で火を消そうとしてくれた方。消防車を呼び誘導してくれた方。五人、十人、十五人と集まり、手伝ってくれた。おかげで火の勢いはだんだんと弱まり、そしてついに鎮火した。芝生は黒焦げで警察や消防も駆けつける騒ぎとなった。

家に帰りようやく落ち着いたとき、ある言葉が頭に浮かんだ。

「困ったときは、お互い様ですよ。」

これは消火活動に協力してくれた方の言葉だ。そんな言葉に私はとても励まされた。母の「周りの人がいなかったらどうなっていたかわからなかった。本当に感謝しかない。」という言葉にとっても共感した。

その後、母はこの一件を新聞に投稿した。動揺してきちんと伝えられなかった感謝を、あのとき助けてくれた方たちが見てくれているといいなと思う。

今回のちよつとした不注意から起こった事故。周りに人がいなかったらどうなっていたかわからない事故。この状況だからこそ、私は人の温かさや助け合い

の精神の大切さに改めて気づいた。人間は一人では無力だ。しかし、たくさんの人々の心がつながり、団結したときには大きく温かい力が生まれると、私は思った。

冒頭で述べた「雨ニモマケズ」の中には、他者を思いやる人の姿が描かれている。私たちの周りにはこの詩のように、見ず知らずの人であっても支え、他者を思いやる気持ちにあふれた方々がいた。私も周りの人を助ける行動をとっていきたい。教室の中。学校の中。通学路の途中。困っている人がいるかもしれない。そのときは、今回助けてくれた方のように「自然と手を差し伸べられる」

「サウイウモノニ　ワタシハナリタイ」